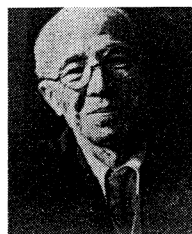


明治18年（1885）大分県山香町の農家に生まれ、昭和33年（1958）東京都世田谷区にて歿。享年73才。若くして大阪に出、次いで郷党出身の著名な政治家を頼って上京。明治大学に学ぶ。明治45年東京市水道課に就職、村山貯水池の土地買収で地元民との折衝に力を尽くす。しかし役所勤めになじめず3年にして退職、東京通信社に入社。また大正5年1月報知新聞に入社。報知新聞は当時の一流紙で、その記者として多くのすぐれた人士と相知ることとなる。当人の回顧談¹⁾によれば、通信次官内田嘉吉、²⁾東京市参事会員藤原俊雄の2人を欧米通として挙げているが、これらの人達から西欧の都市事情を学んだに違いない。大正6年第一次世界大戦のさ中、内田氏と二人で東京市長奥田義人や実業界の元老渋沢栄一を訪い、更には阿南一人で時の内相後藤新平に面会し、説得の末、内務省内に都市計画課が出来、都市計画調査委員会が設置されて、わが国の都市計画の制度を促進することになったという。かくして同年秋には都市計画なるものの啓蒙宣伝のため都市研究会³⁾が創設され、機関紙として「都市公論」が発行された。かくて阿南は報知新聞を退社して都市研究会の常任幹事となり、爾来内務省内の一室に蟠居して天下を睥睨するという生活が始まる。そしてこの都市研究会は昭和21年9月防空協会と共に発展解消して都市計画協会⁴⁾となり、「都市公論」は復興情報と合併して「新都市」となり、阿南は昭和31年都市計画協会副会長になるまで、依然として会務を担当した。大正6年以来約40年に亘る献身であった。性来無欲恬淡、名利を念わず、人の世話を好み、常に椽の下

の力持ちを以て任じた。大正12年以降死に至るまで35年間東京地方裁判所より各種調停委員に選任され、その功績により藍綬褒章を授けられて居り、大正10年から当時居住した麴町区会議員を2期勤め、また昭和5年から20年間、全国市長会の専務理事も勤めた。



いつも笑い声が絶えなかったが、自らを持すること甚だ堅かった。人のいいなりになる人ではなかった。座談の雄であったが、演壇上のスピーチは得意とする方ではなかったし、機関紙の編集者として自ら健筆を揮うよりは人を動かして書かせる方であった。奇特の人というべきである。

注1) 都市計画茶話、「新都市」昭和32年3、4月号

注2) 東京市の人、慶応2年生、明治23年東大法卒、通信省に入る。31年欧米出張、34年管船局長、41年南米出張、43年拓殖局部長兼務、同年台湾総督府民政長官、大正4年辞職、同年南洋協会創立、副会頭、5年通信次官、7年貴族院議員、12年台湾総督、昭和8年歿68才、南方諸国に関する文献の翻訳がある。

注3) 大正6年10月創立、後藤新平会長、官民の有識者を理事に連ね、常務理事池田宏。

注4) 会長潮恵之助、理事長松村光磨、専務理事阿南常一